

るわけですが、前向きとして、古典の中ではどうしたことだったのか、明治維新のときはどうだったのかというようなことをざっとお話しします。

日本には「あたらしい」という言葉がなかったんだね。〈新しき年の始めの初春の今日降る雪のいや重け古事〉（大伴家持）のように、『万葉集』の時代は「あたらし」という語があったけれど、「あたらし」は平安朝になるまでなかった。「あたためる」、リフレッシュする、^{あたら}禊する、それらが「新」の意味だった。季節や暦のイメージだろうと思う。自然には「あたらし」はあるけれど「あたらし」はない。今われわれが言う意味での「新」のイメージがなかったんじゃないか。

例えば『古今集』があつて、『新古今集』ができるとき、『新古今集』のタイトルには「新」だからいい、価値があるという価値観は全然なかったと思う。定家は現在のことを「末の世」という言い方をしている。現在が新しいからいいという価値観は全然なかったと考えていいだろうと思う。「詞は古きを慕ひ、心は新しきを求め、及ばぬ高き姿をねがひて」と定家の「近代秀歌」にあります。が、「心は新しきを求め」は、「ま

だ詠まれない心を詠め」ということなので、新しいからいいとか、そういうこととはどうも違うらしい。

似たような感覚で言われて、現在の価値ということの場合に「流行」があった。芭蕉が「流行」という言葉を積極的に使います。流行っているとは、これは現在の価値なんだということだと思います。芭蕉でも「新しい」という言葉ではなかった。

「新しい」が価値あるもの、カッコイイものとかと言われるようになるのは明治十年代です。スベンサーとかダーウィンとか、「進化論」が日本に紹介され、そのころから新しいものに一つの価値を見出そうという動きが出てきます。例えば「新題和歌」「新派和歌」とか言われますが、これは「新しくていい」というニュアンスを持っていたと思う。進化論と文明開化の流れですね。そういう中で、与謝野鉄幹が東京新詩社を作った。新詩社の「新」に意味を読んでいると思う。竹柏会とか根岸短歌会とかは、「新」に絡まるネーミングじゃないんだ。鉄幹の時代感覚の鋭敏さだったんだろう。戦後、「新歌人集団」ができる。あの「新」も、戦前とはちがうとか、新しいとか、そう

